

二〇二一年四月度 聖書研究発表

『付録』ネヘミヤ記一三章

池谷正基

はじめに

杉並教会では、毎週水曜日の午前中に聖研祈り会が開かれています。毎月第二水曜日は、輪番で参加者が聖書研究の発表を行い、その他の水曜日では情報の共有と課題に沿った祈りの時間を与えられています。

私自身といたしましては、五年間で五回の発表の機会を頂きました。初めての発表は出エジプト記九章〜一〇章、二回目の発表は同じく出エジプト記三二章、三回目が出エジプト記一章、その次がネヘミヤ記一章でした。この間、私は小さい者ながら多くを学び、本当に充実した教会生活を過ごすことができました。私のような日曜日に仕事をしている人間にとっては、平日に行われる聖書研究祈り会が信仰の命綱になっ

ていると言っても過言ではありません。祈り会の対面形式再開と継続を強く希望しつつ、研究発表を通じて、この喜びと感謝の気持ちを少しでも皆様と共有できたら幸いです。以下の文章は、橄欖掲載用により一部再編集したのですが、もともとが口述発表用原稿として作った経緯があり、全体的に口語調となっております。また、お手元に聖書がなくとも内容が分かるよう、今回は聖書本文も掲載してあります。

★ネヘミヤ記一三章概要

ネヘミヤの帰還と神殿制度の回復（一〜一四節）

- ・ 申命記を引用。異国人への扱いを再認識させる。（関連箇所 申二三章三節、創一九章二六節）
- ・ ネヘミヤ帰還
- ・ トビヤの部屋を発見する（一二章四四節）
- ・ 家財を捨てる。（関連箇所 ヨハネ二章一四〜一五節）
- ・ 部屋を清めさせる
- ・ 部屋に奉納物を納める。

- ・レビたちの不在を知る。
- ・代表者たちを詰問する。
- ・レビを神殿奉仕に再任職する。
- ・ユダの人々からの奉納物が集まる。
- ・部屋の管理者を任職する。

安息日の回復（一五〇二二節）

- ・安息日に経済活動をしている者たちを見つける。
- （運ぶ者、売る者、買う者）
- ・経済活動をしている者に警告する。
- ・代表者たちを詰問する。史実を念頭に。

（関連箇所 エレ一七章二〇節、エゼ二〇章一二節、二二章八節）

- ・閉門日時を指示する
- ・直属の配下を門衛にする。
- ・門の外にいる商人に警告する。
- ・門衛をレビに守らせる。

- ・雑婚を見つける。
- ・外国語を使うこどもをみつける。
- ・雑婚する者に物理的な罰を与える。
- 詰問する。髪の毛を抜く。髭を抜く。誓わせる。
- ・ソロモンを引き合いにだして罪を改めさせる。
- ・サンバラテ家の婿であった大祭司の孫をコミュニケーションから追放する。

雑婚に対処する（二三〇二九節）

これまで私たちは一年以上にわたって旧約聖書のエズラ・ネヘミヤ記の学びを続けてまいりました。物語の内容を振り返ってみますと、主だったリーダーが三人登場することがわかります。ゼルバベル、エズラ、そしてネヘミヤです。彼らはそれぞれ異なる時期にエルサレムへ帰還しました。

この三人のリーダーたちにはそれぞれ神様から与えられた役目があったようです。ゼルバベルは神殿を再建しました。エズラは雑婚の解消とともに律法の回復に召されたと言えます。一番あとに帰還したネヘミヤは、ペルシャ王の献酌官でしたが、長い祈りの末、総督としてエルサレムへ派遣されることになりました。エルサレムに到着したネヘミヤは、計画していることを誰にも告げず城壁の調査を行い、すぐさま再建工事にとりかかると、持ち前のカリスマ性と指導力を発揮してわずか五二日で城壁を完成させました。ちょうど前回の聖研で学んだ一二章は、この城壁が完成し、華々しく奉獻式が執り行われた箇所で、かつてトビヤが『狐一匹で：』と蔑んだ壁は、

今や指導者や聖歌隊、楽隊など非常に多くの民がその上を練り歩いてもビクともしない大変頑丈なものとなったのでした。このことだ思い起こすのは、かつてイスラエルの先祖たちがその壁の周りを練り歩き、ときの声を上げ、角笛を吹き鳴らして崩壊させた、あの難攻不落エリコの城壁です。神様は、ある時は敵の強靱な壁を打ちこわし、またある時は民のために強力な壁を打ち立ててくださるのです。はたしてこの二つの話しに直接的な因果関係があるかはともかく、このような力強いお方が私たちの味方についてくださることは、どんなに強大な城壁を与えられるよりも頼もしいことだと感謝したいと思えます。完成した城壁は、民たちにとって物理的な盾となつたことは当然だと思えますし、霊的な側面から観れば、異教、異国の文化からの分離独立の象徴にもなったのではないでしようか。

さて、話しは少し遡りますが、ゼルバベルはエズラ、ネヘミヤの二人とは少しだけ時代の異なる人物で彼の帰還とネヘミヤの帰還に

は一世紀ほどの開きがあるとされていきます。そのゼルバベルですが、彼は捕囚の身にあつたイスラエル人のすべてを引き連れて帰還したわけではありませんでした。(エズラ記一章四節)それは、捕囚の身とは言えど、民たちがバビロンの地で豊かな生活を送っており、今あるものを手放してまでエルサレムに帰還しようと思わなかつたからだと複数の注解書にあります。こういつたいわば残留組と、いよいよ神殿を再建しようとする者たちとを比べてしまえば前者に信仰的な弱さを感じざるをえません。一方、この残留組から経済的支援があつたことや、なにより、後にこの中からエズラやネヘミヤが起こされたことを考えれば、ここに神様の圧倒的で完璧な計画と導きを覚えることができると思います。また、著者がこの出来事を書き記すにあたって先祖たちの出エジプトを想起(出エジプト一二章三六節)したのではないかと思うと、感慨深く感じるところでもあります。このようにエズラ・ネヘミヤ記には、出エジプト時代との連続性を覚える箇所が複数あるわけですが、

これらのことは神様の一貫した救いの計画とその実行、また、連綿と繋がる永続性の香りを豊かに私たちに感じさせてくれるものではないでしょうか。

前五三八年に帰還したゼルバベルが二二年後に神殿を完成させますと、更に五九年後の前四五七年にはエズラがアルタクセルクセスの勅令を得てエルサレムへ帰還することになります。エズラはアロンの直系で元祖律法学者とも言える人物でした。エズラは、主の律法を調べ、実行し、掟と定めを人々に教えようと心に決めていました。

エズラはバビロンを出発すると、護衛もつげずに約四カ月をかけてエルサレムへ到着しました。この旅は、沢山の奉納物を携えての移動でしたから、多くの敵や障害が待ち伏せていたことだと思えますが、聖書にはこの数か月間にわたる道中について多くは書かれていません。しかしながら『神の恵みの御手はたしかに彼の上にあります』(エズラ記七章八節)という一文から、彼の旅路に力強い神様の導きが在ったことや、しかるべき時をかけ、ま

たしかるべき順路で帰還が達成されたものと想像できます。

エルサレムへ到着したエズラを待ち受けていたものは雑婚の問題でした。しかもそれは、指導者、代表者たちなど民の中心人物が犯している罪でした。これを聞いたエズラは自らの衣服を引き裂き、髪と髭を引きぬぎ、呆然と座り込んだとあります。(エズラ九章三節) 雑婚は私たちの神様が最も忌み嫌う罪の一つ『偶像崇拜』にも直結し、イスラエルの純血性にも甚大な悪影響を与えるものでした。ようやく捕囚の身から解放された民たちがさっそくこのような罪を犯したとあれば、これを聞いたエズラの憤慨は当然ですし、一時的ではありませんでしょうが、絶望的な心情に置かれたのではないかと想像します。最終的には雑婚の者たちを離縁させて民を回復へと導くことになるわけですが後にそれすらも蔑ろにされることになっていきます…。

さて、少々長いイントロダクションになってしまいました。ここからは本題の一三章に入りたいと思います。まずは一節～三節を

お読みいたします。

- 一、その日、民が聞いているところでモーセの書が朗読され、その中に、アンモン人とモアブ人は決して神の集会に加わってはならない、と書かれているのが見つかった。
- 二、それは、かつて彼らが、パンと水をもってイスラエル人を迎えることをせず、かえってバラムを雇ってイスラエル人を呪わせようとしたからであった。私たちの神はその呪いを祝福に変えられた。
- 三、民はこの律法を聞くとすぐに、混血の者をみなイスラエルから切り離した。

一三章冒頭は、違和感と共にすこし分かりづらい導入から始まっていると思います。たとえばそれは、前節に至るまでは、華々しい神殿の奉献式と神殿内の部屋の用途や、レビ人や歌うたいの任職が記されていたわけですが、これは明らかに物語りを美しく終結させる最良のタイミングであったと思います。そこで終わっていただければ良いものを、まるで水を

差すように一三章が存在しているのです。まるで余計な付録のようです。しかしこの付録こそがネヘミヤ記の主題であり、神殿や城壁の再建といった幸いな回復だけでなく、訓戒を以って終結に至ろうとする著者の崇高な意図を感じるところだと思えます。

三節では混血の切り離しに話題が及びます。この箇所には議論があるようです。たとえば一二章四四〜一三章一四節では、神殿の部屋の乱用が議論の中心となっており、一つのテーマが全体として統一されていることから、これを無理に切り離して議論するべきではない。という考え方もあります。こういった考え方は、非常に難しい論拠の上に解釈が進められていくことになり、注解書を読み解くための、また別の注解書が必要に感じられるほどです。また、本書の特徴的な編纂方法に一層複雑な理解を加えることにもなると思えます。私としては、今回はできる限りシンプルに聖書を読むことで著者の意図を素直に感じられるよう心掛けていきたいと思えます。そ

ういうわけで、一節〜三節は、王のところから帰って来たネヘミヤがトビヤ(アンモン人)を切り離したこと、そして、改めて律法の朗読を受けた民の応答として混血の者を切り離した(信仰共同体からの離脱)と考えます。

四節以降を読んでいくと、城壁の奉獻式以降にネヘミヤが王のところへ帰ったことがわかります。そもそもネヘミヤはアルタクセルクセスの二〇年に許可を得てエルサレムへ帰還すると、わずか五二日間という驚異的な速さで城壁を再建したわけですが、一方で、たとえ暫時的に王のもとに帰ることがあったにせよ結果的には一二年間も総督としてユダの地に留まったとあれば、これは大変なスローペースのように感じられます。いったいこの間ネヘミヤは何をしていたのでしょうか。このことについて直接的な言及は聖書に見つかりませんでしたが、想像するに神殿と律法と城壁の回復を達成してもなお、民はその信仰的に未熟であり、霊的あるいは行政的なリーダーなしでは成りゆかない状況が続いて

いたのかもしれない。『それにしても長すぎる』という評価もわかります。むしろ世間一般的な感覚からすれば、その方が妥当な評価でしょう。しかし、信仰の成熟という観点からみれば一〇年という期間は決して長くはありません。かつてエジプトを出たイスラエルの先祖たちは四〇年もの時をかけ訓練された歴史すらあるのです。

さて、ネヘミヤは総督として一二年間を務めるとアルタクセルクセスの三二年に王のもとへ帰りました。その後、王のところではしばらく過ごしたと聖書にあります。この暫くという期間が果たして一週間なのか一年なのかハッキリとしたことはわかりません。しかしこの後に続く三つの困難がネヘミヤの不在の間に芽を出し、人々の間で浸透するだけの時間を考えるのであれば、それは数年以上、最大でも十年前後と考えるのが妥当だと思います。

一三章は、帰って来たネヘミヤがこの三つの困難について再びエルサレムを回復へと導く物語りともいえます。再び。と言いました

のは、それがかつては達成された事だからです。それでは、まずは一つ目の困難について聖書をお読みします。六節〜九節

六、この間ずっと、私はエルサレムにいなかった。私が、バビロンの王アルタクセルクセスの三二三年に王のところに行き、その後しばらくして王にいとまを乞い、

七、エルサレムに帰って来たからである。そのとき私は、エルヤシブがトビヤのために行った悪、すなわち、神の宮の庭にある一つの部屋を彼にあてがったことに気づいた。

八、私は大いに気分を害し、トビヤ家の家財をすべてその部屋から外へ放り出し、

九、命じて、その部屋をきよめさせた。そして私は、神の宮の器を穀物のささげ物や乳香と一緒に再びそこに収めた。

大祭司エルヤシブは、宿敵トビヤと親しい関係にありました。この『親しい関係』という言葉は、幅広い意味での近い関係を表すと

され、空間的あるいは時間的なものなど用いられる表現は様々です。ですから、この用語からはトビヤとエルヤシブの関係が具体的にどのようなものであったのかはわかりません。ただし二人が婚姻関係にあったことは六章一八節にハッキリと記されており、深い利害関係にあったことが窺い知れます。そのエルヤシブは、神殿を任される身でありながらネヘミヤが不在であるのをいいことに境内にトビヤの部屋を設けました。その部屋はかつて穀物の捧げもの、乳香、器、油の十分の一、さらには祭司やレビのための奉納物を納める場所でしたが、上層部の腐敗した癒着関係によって敵の侵入を許し、部屋は汚されてしまったのでした。そしておそらく、このような上層部の利害関係は、五章のような民の犠牲の上に成り立っていたのだと思います。

トビヤの侵入に気づいたネヘミヤは自ら部屋の家財全てを外へ放り出し、きよめさせ、本来のあるべき姿に戻しました。かつてネヘミヤが帰還するやいなや、即座に城壁の調査をしたこと、調査を終えるとすぐさま工事に

取り掛かったこと、今回もしかり、ネヘミヤの行動はいつも迅速で少々単独的な印象を受けます。しかしながら七節にある『気づいた』という用語が単純に何かを発見したという意味ではなく、状況をよく観察して理解する意味のビーンが用いられていることから、ネヘミヤの行動が発作的なものではなく、むしろ計画的で、信仰の正当性を持って行われたことだと感じられます。特にトビヤの追放については、まるでイエス様による宮きよめの香りさえ感じられるのです。(ヨハネ二章)

トビヤの追放と部屋のきよめを終えたネヘミヤには、是正すべき問題がもう一つ残っていました。レビの不在についてです。レビは自分たちの土地を持たず、神殿奉仕に集中する者たちでした。そのレビが神殿から姿を消していたとは、いったいどういうことでしょうか。想像するに、久々の帰還を果たしたネヘミヤが神殿の中で目にしたのは、トビヤの部屋。一方でいくら探しても見つからなかったのがレビだったので、ネヘミヤは、この状況をよく観察して理解しました。トビヤの

職務に着かせた。

部屋とレビの不在……。二つの点が一本の線に繋がった瞬間でした。つまりこうです。上層部の癒着は民の困窮を犠牲になり立ち、困窮した民たちは奉納物を怠り、それを糧にしていたレビが去った。ということ。もちろんこれは私個人の推測です。実際には何が原因で何が起こった。という直接的な表現は聖書にありません。しかしながら、すくなくとも『癒着』『困窮』『レビの不在』という三つの事情が相乗効果的に神殿制度を衰退させたことは確かだと思えます。ところで、この件についてネヘミヤが責任を追究したのは逃亡したレビではなく代表者たちでした。聖書をお読みします。一〇節〜一二節。

一〇、また私は、レビ人の分が支給されていなかったため、勤めに当たるレビ人と歌い手たちが、それぞれ自分の農地に逃げ去っていたことを知った。

一一、私は代表者たちを詰問し、『どうして神の宮が見捨てられているのか』と言った。そして私はレビ人たちを集め、元の

一二、ユダの人々はみな、穀物と新しいぶどう酒と油の十分の一を貯蔵庫に持ってきた。

一一節にある『詰問』ですが、これには論争するという意味があります。ネヘミヤは感情的に、また、いたずらに相手をなじめるのではなく、討論によって相手が誤りを認めるようにしたのかもしれない。続いてネヘミヤは、それぞれの農地に逃亡していたレビたちを呼び集めて再び任職しました。するとユダの人々がみな奉納物を神殿に持ってきたのです。これを以って、蔑ろにされた神殿制度を回復させた評価できると思えますが、ネヘミヤは回復ばかりではなく、今後のことを案じて予防策を付け加えるのです。この徹底した対応こそネヘミヤの特徴ではないでしょうか。聖書をお読みします。一三節。

一三、そこで私は、祭司シエレムヤ、学者ツァ

ドク、レビ人の一人ベダヤに貯蔵庫を管理させ、マタンヤの子ザクルの子ハナンを彼らの助手とした。彼らが忠実な者と認められていたからである。彼らの任務は仲間に分配することであった。

ネヘミヤの処置は実に抜け目なく緻密な印象を受けますが、はたしてどのような基準に沿ってこの者たちを選んだのか気になります。シェレムヤが祭司として、あるいはツアドクが学者として優秀だったからでしょうか。人々から尊敬や信頼を受ける者だったからでしょうか。では、助手についたハナンはどうでしょうか。もしかすると将来有望な若者だったのかもしれませんが。しかしここにあげられる四名についての情報は不確かで同じ名前を他の箇所でも複数見つけることができますが、それらが同一人物であるかはハッキリしていません。したがって、彼らが何故にこの職を受けることになったのかは、一三節中段に焦点があてられるべきでしょう。すなわち『彼

らが忠実な者と認められていたから』です。アーメン。その通りです。これこそ奉仕者、あるいはキリスト者の標準ではないかと思うのです。私たちは有識者や企業人を初め、この世で価値があると認められた人、いわゆる“優秀な人”を教会の役員に選んではいけないでしょうか。そうならば、改めなければいけないと思います。そのような基準は神様からすれば無価値とも言えるからです。続く一四節の祈りからは、ネヘミヤ自身が神様の御前に忠実さを追求していたことが伺えます。聖書をお読みします。一四節。

一四、私の神よ、どうか、このことのゆえに私を覚えていてください。私が神の宮とその務めのためにした数々の誠実な行いを、ぬぐいさらさないでください。

総督としてネヘミヤが行ってきた処置はいつも主に在って執り行われたものでした。この祈りも、ネヘミヤが己の成したことを人々の前で誇るのではなく、神様の成果として

世々限りなく続くことを求めているように思えるのです。

さて、ネヘミヤは二つ目の困難に着手します。聖書を読んでみるとこれら複数の処置は間髪をあげず、また、連続的に採り進めた印象を受けますが、時系列についての詳細は不明です。ただ、個人的には間髪を空けないどころか並行的に処置をしたのではないかとも思うのです。ネヘミヤは祈りの人ではありませんでしたが、いざ動き出せば驚異的なスピードでことを成す人だったからです。聖書をお読みします。一五節〜一八節

一五、そのころ私は、ユダのうちで安息日にご
どう踏みをしている者、麦束を運んで
いる者、また、ロバに荷物を負わせてい
る者、さらに、ぶどう酒、ぶどうの実、
いちじくなど、あらゆる品物を
積んで、安息日にエルサレムに運びこ
んでいる者を見つけました。それで私は、彼
らが食料を売ったその日に、彼らを戒

めた。

一六、また、そこに住んでいたツロの人々も、
魚などあらゆる商品を運んできて、安
息日に、しかもエルサレムでユダの
人々に売っていた。

一七、そこで、私はユダの有力者たちを詰問し
て言った。あなたがたが行っている悪
事は何か。安息日を汚しているではな
いか。

一八、あなたがたの先祖も、このようなことを
したので、私たちの神はこのすべての
わざわいを私たちとこの都の上にもた
らされたのではないか。それなのに、あ
なたがたは安息日を汚して、イスラエ
ルの上にまたもや御怒りを招こうとし
ている。』

ネヘミヤが直面した二つ目の困難は、安息
日を蔑ろにしている民の日常についてでした。
王のところから再び帰って来たネヘミヤは、
少し離れたところにある村々まで視察のため
に回ったと言われています。そしてこれは、

状況的に考えればお忍びのような視察だったと想像できます。ちょうど、誰にも告げず城壁調査に出たあの時のようです。この視察でネヘミヤが目の当たりにしたのは安息日に葡萄を踏む者や麦束を担ぐ者、それらを中心地に運び込んで売り買っている者たちでした。そしてこれは、ロバを使った荷物の運搬まで行われていたということから分かるように、一部の人間による、あるいは少量のことではなく、むしろ多くの人間によって安息日が蔑ろにされている状態にあったことが伺えるのです。そこにはもはや『真の神を信仰する街、エルサレム』の姿はありません。あるのはただ、生活を優先し、異国人とともに経済的豊かさを追求する者たちの姿でした。また、聖書には明記されてはいませんが恐らくこの問題は、安息日に限定したことではなかったのだろうと察します。なぜならば当時のユダヤ人たちにとって安息日を厳守するということは、ある種、律法の代表的なものだったと理解できるからです。それはいわばユダヤ人と異邦人を区別するしるしであり、安息日を

厳守することが律法全体に対する忠誠を表明する役割すらあったのではないかと思うのです。逆に言えば、ここに綻びが生じれば瞬間に異教の文化が浸食し、律法全体が蔑ろにされ、御怒りを受けることに直結するのです。

かつてエズラが雑婚を解消するとともに回復させた律法遵守の精神がいまや崩壊寸前であるのを見たネヘミヤは、きつと強い危機感を持ったのだと思います。彼はこの事態を見つけると、その日のうちに荷運びする者や売る者に対し嚴重に警告し、一方で有力者たちには史実を以って更に強い姿勢で戒めたのでした。(エレ一七章二〇節、エゼ二〇章一二節、二二章八節)しかし、ネヘミヤの対処はまだ終わりません。実に抜け目なく、緻密な人物だと感服します。聖書をお読みします。一九節〜二二節

一九、安息日の前、エルサレムの門に夕闇が迫ると、私は命じて扉を閉めさせ、安息日が終わるまでは開いてはならないと命

じた。そして、私の配下の若い者の何人かを門の見張りに立て、安息日に荷物を持ち込まれないようにした。

二〇、それで、商人やあらゆる品物を売る者たちは、一、二度エルサレムの外で夜を過ごした。

二一、そこで、私は彼らを戒めて言った。『なぜ、あなたがたは城壁の前で夜を過ごすのか。もう一度このようなことをすれば、私はあなたがたを処罰する。』その時から、彼らはもう安息日には来なくなつた。

二二、また私はレビ人に、安息日を聖なるものとするため、彼らが身をきよめ、門の見張りとして来るように命じた。私の神よ。このことにおいてもどうか私を覚えていてください。そして、あなたの豊かな恵みにしたがって私をあわれんでください。

この当時、安息日は土曜日でした。また、日没を区切りとしていましたので金曜日の夕方過ぎから城門を閉じるように命じたことにな

ります。この処置は安息日の当日に商売をさせないために前もって商人などの入場を禁じたものと考えられます。するとどうでしょう。門の中に入れない商人たちは城壁の前で夜を過ごしたとあります。私は初めこの箇所を読んだときに『安息日が明けるのを待っていたのだらう』と、家に帰ることもせず野宿をする商人たちを想像し、少し健気にさえ思いました。いったいなぜこれをネヘミヤは咎めたのでしょうか。これについてはいくつかの注釈書でも合意が得られているようです。どうやら商人たちは暗闇に紛れてスキをつき、城内へ入り込もうとしていたり、逆に市内の者が外に出ようとしていた可能性があると言うのです。であるならば、残念ながらネヘミヤの警告はまったく軽んじられていたことになります。だからこそネヘミヤは行政的な実行力を持つ直属の配下を門衛に任命したのでしよう。また、これを段階的にレビへと役割移行させたことは、門衛の務めが安息日を厳守するための霊的な意義を持つものと考えていたからだと思います。いずれにしてもネヘミ

ヤの徹底した対処でなければ安息日は引き続き軽んじられていた可能性が高かったということです。

さて、いよいよ一三章も終盤となります。ネヘミヤは部屋の清めや神殿奉仕人の任職など、いわば神殿制度の回復について働き、安息日の厳守とそれを通じた律法全体の回復について尽力しました。そして最後の働きとして雑婚への対処がこの後に続くのですが、その前に是非、ネヘミヤの役割について皆様と共有したいことがあります。既に述べた通り、ネヘミヤは第三陣の帰還者です。彼が長期にわたって祈り、ついにアルタクセルクセス王の許可を得てエルサレムへ帰ることとなるその前にゼルバベルとエズラが帰還を果たしていたのです。この二人が行ったことが神殿再建と律法の回復でした。そして最後に帰還したネヘミヤは、最初に取り掛かった城壁の再建に留まらず、かつて達成され、今や崩壊寸前となっていた先人たちの功績（神殿と律法の回復）についても補強をしたのです。また、これら再回復とも言えるネヘミヤの働きが終

章に配置されていることから、華々しい奉献式をもってハッピーエンドとするよりも訓戒を以って物語を継続させようとする著者の意図を感じることができます。そしてそれは、やがて来る救世主と、自力では律法を厳守することができない私たちのための贖いの物語りへと繋がっていくのです。つまりネヘミヤの働きは、やがて現れるイエス様の伏線となっているということです。

それでは、話しを戻して聖書をお読みします。二三節〜二四節

二三、そのころまた私は、アシウドデ人、アンモン人、モアブ人の女を妻にしているユダヤ人たちに気がついた。

二四、彼らの子どもの半分は、アシウドデのことばか、あるいはそれはそれぞれほかのことばを話して、ユダヤのことばがわからなかった。

このように、三つめの困難は雑婚に関わるものです。雑婚は、かつてエズラが対処し、

律法の朗読を通じて一度は回復させた問題でしたが、しばらくの時を経て人々は再び同じ罪に陥っていたのでした。この過ちはモーセやソロモンの時代をはじめ、歴史の中で繰り返し行われた経緯がありますし、直近においても学者エズラが対処したことだったので、さすがのネヘミヤも『もう勘弁してくれ』といわんばかりに嫌気がさしたかもしれません。しかしモーセや預言者など神様によって立てられたリーダーを思い出してみれば、彼らは御前に忠実なだけでなく困難の前では大変辛抱強い者たちでした。ネヘミヤも多分に漏れず同じ性質を持っていた、あるいは御手によってその性質へと教育された人物でした。

さて、雑婚そのものについては歴史の中で繰り返し返されてきた事実がありますが、ネヘミヤが今回新たに衝撃を受けたこともあるようです。『次世代の腐敗』についてです。二四節には異国の女性と結婚したユダヤ人たちと、その子どもが話す言語について記されています。ここに『半分が』とありますが子ども人口の半分という意味なのか、あるいは子ども

もたちが使う言葉の半分が。という意味なのかは不明です。ただ、いずれにしても国際結婚をした両親のもとに生まれ育った子どもたちの言語が不安定な状態にあったことはわかりません。私はこの箇所を読んだ時になんとも言えない恐ろしさを感じました。先に安息日を守ることは、いわばユダヤ人としてのしるしだと言いましたがヘブライ語という文化もまた、ユダヤの象徴でありアイデンティティだと思ふのです。次世代の子どもたちが悪意なく外国語を使う様など、一見平和そうに思えますが、当時のことをよくよく考えてみれば身震いするような恐ろしい事態に感じられるのです。また、言語は文化の中心的存在とも言えますが、これが外国語に浸食されていくということは、その他さまざまユダヤ的文化も無傷ではなかったものでしょう。実際、これまで述べてきたように神殿制度や安息日という重要なアイデンティティは崩壊寸前だったのです。しかし、このような重大な問題に対してネヘミヤの対処は以外なものでした。二五節〜二七節。

二五、そこで私は彼らを詰問してののしり、そのうちの数人を打って毛を引き抜き、神にかけて誓わせて言った。『あなたがたの娘を彼らの息子に嫁がせてはならない。また、彼らの娘をあなたがたの息子、あるいはあなたがた自身の妻にしてはならない。』

二六、イスラエルの王ソロモンも、このことで罪を犯したではないか。多くの国の中で彼のような王はいなかった。彼は神に愛され、神は彼をイスラエル全土を治める王としたのに、その彼にさえ異国人の女たちが罪を犯させてしまった。

二七、あなたがたについても、異国人の女を妻とし、私たちの神の信頼を裏切るというこの大きな悪が行われていることを聞かなければならないのか。』

かつて同じように雑婚の罪について報告を受けたエズラは自分の髪と髭を抜いて座りこ

んでしまいました。ネヘミヤはこの点において実に対照的で、自分ではなく雑婚の者をののしり、打ち、毛を引き抜かせ、誓わせました。これだけを見れば、まるでネヘミヤが怒りを抑制できずに爆発させたようにも読めますが実はそうでもないようです。なぜならネヘミヤは、かつてエズラが採用した最も厳しい処置をとらなかつたからです。その処置とは、離婚です。

罪、過ちについてあれほど徹底的な処置を続けてきたネヘミヤがどうしてこのような重大事項において、相手の毛を引き抜く程度で済ませたのでしょうか。私は今でもこのことを不思議に思うのです。この件については、複数の注解書でも意見が分かれるようです。たとえば、ある注解書は『離婚をさせずに改宗をさせた可能性がある』と言います。また別の注解書は『過去、エズラの離婚処置によって起きた家庭崩壊を覚えて気持ちが引き締められた』と言います。しかしどの注解書も可能性を示すまでで、この処置についての実効性や詳細について結論は出していません。

です。わからないままなのです。一方で、合意がとれている重要なこともあります。それは、ネヘミヤの処置がリーダーとして十分なものであったか否かに関わらず、民たちが永続的に、あるいは完全に律法を守ることは、どのみち果たせなかつたということなのです。ネヘミヤは再回復に尽力し、たしかに神様の計画に用いられたわけですが、それでも後の世で（紀元七〇、ローマ軍）城壁と神殿は壊されてしましますし、ユダヤの民も離散することになるのです。つまり、ゼルバベル、エズラ、ネヘミヤ、あるいは知者ソロモンまで……。どんなに優秀なリーダーが立てられても不十分であり、先人の預言者たちが待ち望んだ希望の最終段階には到底至らなかつたということです。しかし、これはなにも民たちのネガティブなイメージを以って話を終わらせようということではありません。また、『どうせダメなんだ』と聖化の道を放棄するものでもありません。

ネヘミヤ記には、訓戒と共に物語を継続させる意図があるように感じられますが、それ

ではいったいこの物語はどこへ向かおうとしているのでしょうか。どこへ継続していくというのでしょうか。いわずもがな、この物語はイエス様の贖いへと続いていくのです。人が律法に基づいて神様との関係を回復し続けることができない不十分な存在であることはネヘミヤ記からも明らかです。そのような私たちを贖われるためにイエス様は地上に降りて来られたのです。そのイエス様もたらしめて下さるものは、それまでの回復とはわけが違います。もはや回復というよりも新しい出発なのではないでしょうか。これこそ預言者たちが待ち望んだ究極的な希望。ネヘミヤ記の真のフィナーレなのかもしれません。

旧約の歴史は罪と回復の繰り返しでした。人がどれだけ強く改心してもすぐに悪へと傾倒する性質を持つ存在だからです。現代に生きる私たちも同じように礼拝で心満たされる時、その帰り道には心を乱しています。人を嫌い、妬み、争ったりもします。そんな罪に勝てない己の不十分さを度々痛感しています。しかし私たちは、自分の罪深さに悲しんで終

わるのではありません。己の愚かさを痛感するほどにイエス様が罪から贖ってくださったという希望がセツトで与えられているのです。エズラ、ネヘミヤ記が究極的に指し示すイエス様の存在、贖いを喜び、心から感謝して歩んで参りたいと思います。